

日露戦争百周年で思い起したいくと

元防衛大学教授
平間洋一

大人と子供の戦争

日露戦争当時の日本の人口は四千五百万、ロシアは属国を加えれば一億五千万、国家財政はロシアの七分の一、陸軍兵力は五分の一、海軍兵力は七割強に過ぎなかった。このような日露の兵力差から、陸

軍参謀本部次長で後に満州軍総参謀長となった児玉源太郎大將は、親日世論工作、早期講和の斡旋などのために米国に派遣される金子堅太郎に、「どうしても勝利を得る見込みがないから、三倍の兵力をもつて最初に敵の士気を挫き、その心胆を寒からしめようと思う。まあ、今のところは五分五分だが、私はこれを六分四分にしよう、今日まで三〇日間赤毛布にくるまって参謀本部内に起居して苦心している。そこで五度は勝報、五度は敗報を受け取る覚悟でいてくれ」と打ち明けていた。一方、海軍大臣の山本権兵衛も「軍艦の半分は沈没させる覚悟だ。それでも勝利を得ようと良策を案じている。これ以上は君に話すことはできない」と語っていた。

外国では日本擁護派の英国人記者アルフレッド・ステッドが、「日本がちっぽけな国ではないということ、一般の人々に納得させることは不可能だっ

た」。「日本が戦争を始めた勇氣も、自らの力を知つてというよりも、向こう見ずとみなされていた」と書いているが、日本軍が旅順を攻略しても、『デイリー・ニュース』は「日本がワーターロー（最終的陸上戦闘）に勝利するか、未だに確信が持てない」と報じていた。

このように、兵力比から見れば日露戦争は全く無謀な戦争であった。それなのに、なぜ日本は旅順を奇襲し戦争を始めたのであろうか。それは日本の存亡がかかっていたからであった。極東で「絶対優位権ヲ確立セント欲ス」るならば、「日本人ヲ撃破スルノミニテハ不十分」で、「更ニ之ヲ殲滅」すべきであるなどの強硬論が、ロシア海軍の対日戦争計画者やニコライ海軍大学の対日戦争図上演習では議論されていたのだ。このようなことから、日本が立ち上がらなかつたならば、二年後にはシベリア鉄道が開通し、艦隊増強計画が完成し、日本は手も足も出せなくなり、満州だけでなく朝鮮半島、さらには対馬や北海道なども占領されていたかもしれなかつた。

改竄されてしまった日本の近代史

日露戦争が始まると黒人の新聞には「行け黄色い

小さな男たちよ。巨大な地球の埃を、欲望の固まりのロシアを投げ飛ばせ」などの詩が掲載され、『ニューヨーク・タイムズ』には「日本の勝利は『文明の凱旋』であり、迷信に惑溺し、宗教により人を虐げる『金城鉄壁』を破壊した。人類の自由進歩の最大の障害物を崩壊し取り除いた」と報じた。また、インドの新聞『サメイ』は「日本が西欧との戦争に勝利したことを誇りに思う。われわれは勇氣と規律、鉄のような意志、不屈の力によって勝利を収めた日本に心からの祝福を贈る。日本がアジアの名誉を救った」と報じていたが、これが当時の世界の日露戦争に対する一般的な史観であった。

日露戦争から百年、大東亜戦争から六十年が過ぎると、国連事務総長のポストは有色人種の指定席となり、米国でも黒人のライス國務長官が誕生した。われわれの祖先が一世紀をかけて今日のような人種平等、民族国家の独立という輝かしい二十一世紀を築ききっかけを作ってきたのである。それだからこそ、ガリ前国連事務総長が来日の度、五回も東郷神社に参拝したのである。このように、民族国家独立や人種平等への夢をアジアやアラブ、アフリカの国々に与えたのが日露戦争であった。

しかし、このような史観は連合軍司令官マッカーサー元帥によって変えられ、

サーは日本が二度と米国や世界の脅威とならないように、日本人に贖罪意識を植え込む「戦争贖罪計画（占領軍一般命令第四号）」を発し、占領軍民間情報教育局が提供する「太平洋戦争史」を主要新聞に掲載させ、「真相はこうだ」などのラジオ放送を強制し、見せしめの東京裁判を演じた。反論は検閲や公職追放令で封じ、五年間の占領中に日本人の脳裏に贖罪意識を摺り込み、さらに平和憲法を強制し、「人命は地球より重く、奴隷にされても平和を愛する」平和史観を埋め込んだのである。

次いで冷戦が始まると、ソ連は西欧諸国や日本の植民地支配を帝国主義と批判した。このソ連の帝国主義史観に左傾した学者や日教組などが迎合したため、懺悔史観が戦後世代に埋め込まれてしまった。その後、ソ連が崩壊し共産主義を讃えてきた学者やジャーナリストが存在価値を失うと、活路を求めて一斉に自国の歴史から中国や韓国の好みそうな問題



1933年生まれ。防衛大学校卒業（一期）、法学博士（慶応義塾大学）。88年に海上自衛官を定年（海将補）して防衛大学校教授。現在は太平洋学会理事、軍事史学会理事など。主著に『日露戦争が変えた世界史』（芙蓉書房出版）、『第一次世界大戦と日本海軍』（慶応義塾大学出版会）、『日英同盟』（PHP研究所）、『日英交流史（軍事編）』（東京大学出版会）など多数。

を取り上げ「ご注進」をした。これを受けると両国は対日歴史攻勢を開始した。この結果、贖罪意識に洗脳された日本では「朝鮮を植民地とし、満州や中国を侵略し朝鮮人や中国人に耐え難い苦痛を与えた」との懺悔・自虐史観が強まり、先のマルクス史観と合体し、日本の近代史や戦争は全て歪曲され改竄され醜悪化してしまった。

日本はなぜ日露戦争に勝利できたのか

日露戦争に勝利すると、世界は小国日本がなぜ勝つたのかに関心を寄せ、新戸部稲造の『武士道』の「義（国家や国民に尽くす精神）」は武士の「骨格」であり基盤である。いくら才能や学問があっても、「義」がなければ武士ではないと説いたこともあり、世界は日本の勝利を武士道に求めた。日本海海戦に勝利すると「タイムズ」は、「勝因は軍艦にも砲にも乗組員の熟練度にも、戦術の巧拙にも求められない。精神的性格や高遠な理想、やむにやまれぬ熱情や、あまねく浸透した責任感と愛国心などに求められるべきだ。対馬海戦の勝利は武士道によってもたらされたものである」と報じた。

一方、旅順攻略作戦は多数の死傷者を出したことから、日本では愚将乃木希典などと非難されているが、フランスのスーグリエ將軍は旅順攻略戦は「精神的な力、献身的な愛国心および騎士道的な死をも恐れぬ精神力による圧倒的な力の作用の教訓となる印象深い戦例である」と、日本兵の生命を顧みない忠誠心を讃えた。

アルゼンチンの観戦武官ガルシア大佐（のち大將・海軍大臣）は、「ある人は日本海海戦の勝利は

海軍軍人のみならず、日本人すべての努力によるものであるといった。これは疑いのないことであり、対馬においてロシアを敗北させた日本人ほどの熱烈な愛国心を有する国民を他に見出すことは困難である。呉や佐世保の海軍工廠において、修理中の水雷艇の船体に鉄を打つ慎ましい工員から、最高責任者という高い地位にある提督に至るまで、全ての国民が祖国日本に奉仕するために任務を遂行していると自覚していた。このような考えや感情は、軍事を中心とする領域に止まらず、日本の国家全体に及んでいた」と報告した。

実際、伊藤博文は「露軍が大挙九州海岸に來襲するならば、自ら卒伍に列し武器をとって奮闘するだろう。軍人が全滅しても博文は一步も敵を国内に入れない覚悟である」と語るなど国民の先頭に立っていた。陸軍では大山巖元帥が参謀総長を辞任して満州軍総司令官に、陸軍大臣兼内務・文部大臣を歴任した児玉源太郎大將は参謀本部次長を辞任して、満州軍総参謀長となって大山元帥を支えた。このように、当時の指導者は己を捨て榮譽も地位も省みることなく、二階級も三階級も下の配置に身を置き、国家のために戦ったのであった。

一方、戦後の日本では公に対する義務や奉仕は無視され、政治家や経済人は国益を無視して「利」に生き、中国や韓国の分断策に踊らされ土下座外交を続けている。日露戦争で世界が学び讃えたのは拳国一致の愛国心であった。日露戦争百周年を迎えた今、「義」を掲げ国難に立ち向かった明治の人々の気概を思い起こし、明治のように一致団結して国難にあたり、凛とした日本を作りたいものである。

千万の民の力を集めればいかなるわざもならむとぞ思う（明治天皇御製）。